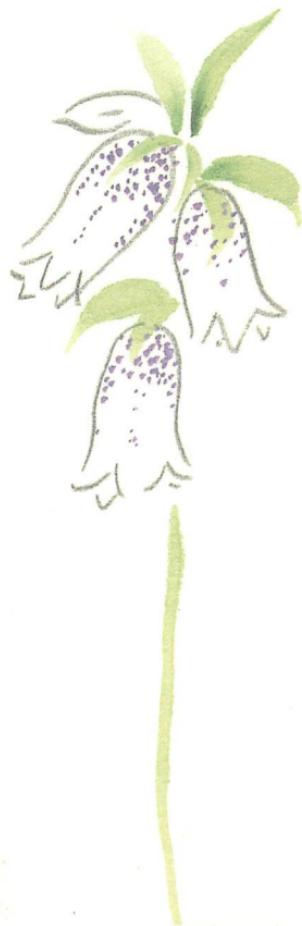


みめぐみの

第36部



みめぐみの

第36部



15

大谷光道著

目 次

阿弥陀様と本願（六）	2
極楽の入口	2
極楽での寿命	4
極楽での善くないこと	7
わー、すごい	9
名号は「南無阿弥陀仏」	12
「回向」という名のプレゼント	14
「他力」のおさらい	16
伝統のままに得度式	19
饗の御膳	20
縁儀（お練り）出列	21
規式（得度式）	22
初勤行	22
心あらたに——大谷光純——	26
あとがき	31

阿弥陀様と本願（六）

今回は第十四願からです。極楽の人口や壽命、善惡、そしていよいよ往生させる力のお話です。

極楽の人口

第十四願 設我得仏、國中聲聞、有能計量、下至三千大千世界聲聞・縁覺、於百千劫、悉共計校、知其數者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人々の数に限りがあつて、三千大千世界の聖者たちが一人乃至全員で皆一緒になつて百千劫の時間をかけたと



起工式での鍬入れ

き、その数を数えつくせることであれば——多くの人々が力を合わせて長時間をかけたなら数え尽くせる、という程度の人数であるならば——、私は覚ったとは言いません。（声聞無数の願）

下至〇〇＝乃至〇〇。一から〇〇まで。
計校＝計算すること。計り考えること。

これは「極楽の住人の数を無数であるようにさせたい」との御本願ですが、「多くの人数で長い時間をかけて……」と、たいへん複雑な表現になっています。

お経には、数の多いこと、時間の長いこと、量の多いこと、物が大きいことなどに、たんに「多い」とか「大きい」などと言わずに、このように「多人数で長時間をかけて、一、二、三……一〇一、一〇二、一〇三、……と数える」などの表現がしばしば用いられています。これは拝読する我々に、実際に数えてみてそのイメージを起こさせることによつて、頭の中だけの抽象

的な数になつてしまわないようになるとのご配慮だと思われます。たんに「阿弥陀様の極楽には多くの人がおられる」だけだとすると、たしかに意味はわりやすいにしても、やはり極楽の偉大さがもう一つぴんと来ないことになりますね。

こう言う私も、実は以前、一億なら一億、一兆なら一兆と言えばすむものをとthoughtしていました。しかし、一、二、三と数えることで、そして数え切れないことを経験することによって、極楽にはいかに多くの方々がおられるのかを実感することが大切な事柄である、と思うようになりました。

極楽での寿命

第十五願 設我得仏、國中人天、壽命無能限量。除其本願脩短自在。若不爾者、
不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人々の寿命は限りがないようになさ

せます。しかし、本人の希望によつてはその長短は自由にさせましょ
う。
それができないようなら、私は覺つたとは言ひません。

(眷属長寿の願)

「極樂の住人の寿命を永遠のものにしてやりたい」との御本願です。

本来、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人という六道に輪廻を繰り返して
きた私たちが、その輪廻の鎖を断ち切つて、そこから抜け出す（解脱）こ
と——つまり覚りを開くこと——を目標とするのが仏教です。したがつて、
せつかく得た、極樂という覚りの国での永遠の生活なのに、「命を短くして
ほしい」などと本人が希望することがあるのでしょうか。

ここで少し角度を変えて考えてみると、次の疑問が出てきます。

「みんなが極樂に行きっぱなしだったら、いつたいどなたがこの世で『衆生
清度』をしてくださるのだろうか」と。



本堂の起工式（4月12日）

実はこの問題の答えは、あとでお話しすることになる第二十二願にあるのです。つまり、

「いったん極楽に往生した人が、衆生を済度したいというその人自身の願いがあるときは、再びこの世に還つて来させてやりたい」

と、第二十二願に誓われているのです。

その本人の願いとはあくまでも衆生済度であつて、「この世が恋しい」とか「○○に未練がある」とかのために、「もう一度この人間世界に還つて来たい」という願いではありません。

もしそのようない未練心からだつたとしたら、それはもともとはじめから覺りを求めていたのではなく、この世で長生きがしたかつただけだつたということになるからです。

この世に未練があるだけなら、別に尊いことでも何でもありません。衆生済度の思いを起こし、折角の永遠の命を捨ててまで、再びこの世に戻ろうとすることは、並大抵の者のできることではありません。そのあたりは第二十一願のところでお話ししましょう。

極樂での善くないこと

第十六願 設我得仏、國中人天、乃至聞有不善名者、不取正覺

私が成仏するとき、私の國（極樂）に不善の者が居たり、また（不善という）その名さえあるようだつたら、私は覺つたとは言いません。

（離譏嫌名の願）

譏嫌＝そしりきらうこと。

「不善」というのは読んで字のごとく「善くない」ことで、「極楽には善くない者が一切いないようにしたい」と誓つてくださっているのです。さらに、「『不善の名有り』と聞くようであれば」なので、不善の者が居ないだけでなく、不善という言葉・用語すらない世界にしようと仰つているのです。

物事の名前には必ず、その名前の表す中身があります。我々の日常でも、中身・実体のないものには名前は付いていません。

たとえば、外国の文物が日本に入ってきたとき、それに付いたカタカナの名前も一緒に入ってきます。これが外来語と言われているものです。外国から入つてくる新しいものは、生活を豊かにするプラスのものと、最近問題になつてゐる新型インフルエンザ（豚インフルエンザ）などのように「招かれざる客」もあります。新型インフルエンザなどは極楽にはあつてほしくない名前です。

この第十六願では、「極楽には『不善』という好ましくないものは、その姿形も痕跡もない」と誓われているのです。

わー、すごい

第十七願

設我得仏、十方世界無量諸仏、不悉咨嗟称我名者、不取正覺

私が成仏するとき、十方世界の数限りない諸仏たちが、ことばとくため息をついて私の名をほめ讃えないならば、私は覚つたとは言いません。

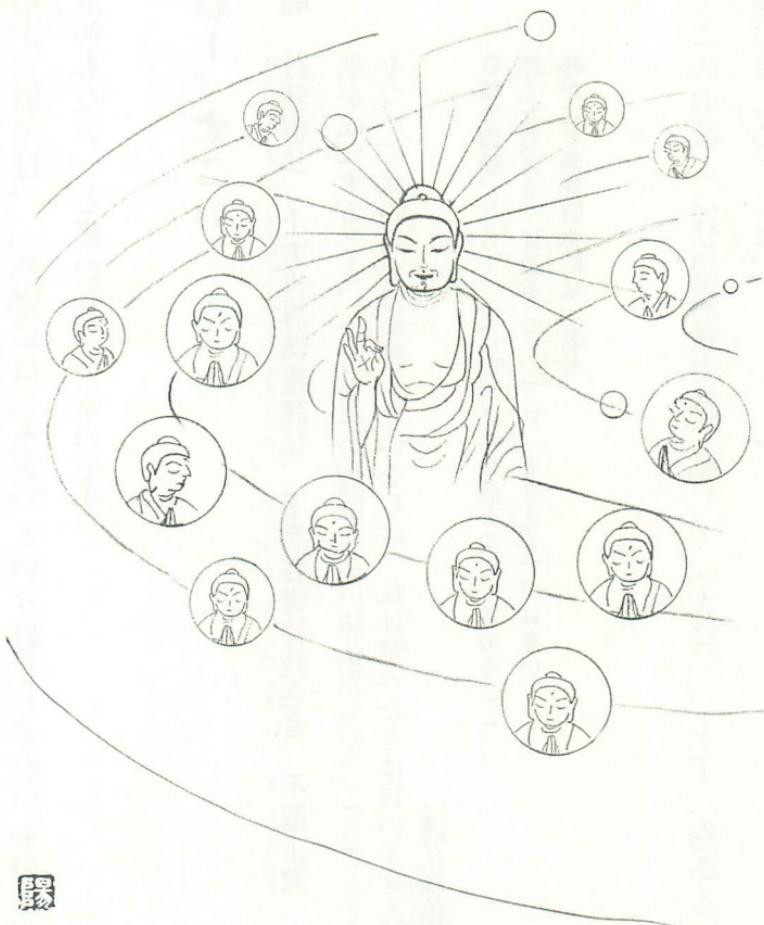
(諸仏称揚の願)

咨嗟=讃嘆。「わー、すごい」とため息をついてほめること。

称=たたえる。ほめる(ここでは「となえる」ではない)。

我が名=南無阿弥陀仏。名号。

そしてこのお経(『仏說無量壽經』略して『大經』、上下二巻ある)の後半(下巻のはじめ)には、



諸仏称揚

十方恒沙、諸仏如來、皆共讚歎、無量壽仏、威神功德、不可思議。

十方＝東西南北とその中間（北東、北西、南東、南西）及び上下。あらゆる方角。

恒沙＝ガンジス河の砂の数ほど。無数の。

威神功德＝衆生を自在に救うことのできる不可思議なはたらき。名号の功德。

あらゆる方角においてになる無数の仏様たちが、皆一緒に阿弥陀様の威力のあるお徳の不可思議なことをほめ讃えられる。

と説かれていて、この第十七願がすでに成就していることが明記されています。つまり、第十七願において阿弥陀様が願われたことがすでに現実のものとなつているのです。

ここで第十七願に、

「諸仏（阿弥陀様以外の仏様）がため息をつくほど感心しておほめになる」とあります。それは何に感心されてのことかというと、

多くの仏様たちが、「これまで、自分たちには容易に救うことのでき

なかつた衆生（凡夫）を、しかも『南無阿弥陀仏を称えるだけ』というまことに簡単な方法を衆生に与えて救うという離れ業を、阿弥陀様が成し遂げられたのだ』

と、阿弥陀様の偉業に感心されてのことです。

実際、阿弥陀様以外の仏様は、私たち衆生が自力の修行を行うについて、教え・導き・手助けをしてくださるのですが、阿弥陀様のような「丸抱え」ということがないことを併せて考えると、他の仏様たち（諸仏）がため息をつかれることが一層よくわかります。

名号は「南無阿弥陀仏」

さて、「南無阿弥陀仏」と言えば私たちの称える称名念佛であることは、今さらお話しするまでもありません。ところで、「南無阿弥陀仏」はまた、

阿弥陀様のほうからするとご自身の名乗りなので、同じ「南無阿弥陀仏」でありながら、それは「名号」^{みょうごう}であるということにもなります。

名号^{みょうごう}というのは仏・菩薩のお名前のことで、一般的にも、仏・菩薩の名号には特別な力があり、それを聞いたら唱えたりすると功德があると説かれます。ご承知の通り浄土教では、「阿弥陀様の名号を称えることによつて極楽に往生できる」と教えられています。

その根拠がこの第十七願にあるのです。



重機搬入（5月29日）

が「阿弥陀仏」ではなく「南無阿弥陀仏」なのかということです。これは、阿弥陀様のほうからすると南無とは「凡夫を救わぬにはおかぬ」という強い願いのことであり、南無というのは凡夫救済のパワーです。つまり南無阿弥陀仏とは阿弥陀様の活動のお姿です。そして一方、凡夫のほうからすると、南無とはそのパワーに全幅の信頼をもつて寄りかかるということです。ですから南無阿弥陀仏は、阿弥陀様と凡夫の接点なのです。これが、たんに「阿弥陀仏」ではなく「南無阿弥陀仏」が阿弥陀様の名号であると言われるゆえんです。

「回向」という名のプレゼント

よく「お寺さんに回向してもらう」とか「亡くなつた人に対しても回向する」とかと言います。回向とは、自分の積み重ねた善根（読経とか念佛など成仏のためになる善い行い）を回らし向けることです。それで私たちは、自

分の覚り（成仏）や亡くなつた人の成仏のために役立てようと、少しでも善い行いを積もうとします。

このように、私たちが自分の力で行おうとする回向を「自力の回向」と言います。浄土真宗では、「煩惱にまみれた凡夫がいくら自力を重ねてもそれは不純物だらけの善（雜毒の善）で、その結果はたかが知れている。阿弥陀様からいただくご回向こそ本物である」と教えます。

この阿弥陀様のご回向が「他力の回向」と言われるもので、それが完成したのがこの第十七願なのです。阿弥陀様が私たちには想像もつかない長い時間のご苦心とご苦労をされたことは、折に触れて、またこの本願シリーズでもお話ししたところ（『第二十九部』参照）なのでここでは繰り返しませんが、第十七願では、その阿弥陀様の積まれた限りない善根を南無阿弥陀仏という名号の中に詰め込んで私たちに回らし向けて（プレゼントして）くださることが誓われているのです。私たちが「南無阿弥陀仏を称える、ただそれ

だけで浄土に往生できる」のは、正にこの第十七願のお陰といわなければなりません。

「他力」のおさらい

ここで少し「他力」ということばについてお話ししておきます。「他」というと、私たち日本人は「自分以外のものすべて」を指すことばとして使う習慣がついているので、「他力」というと「他人力」を連想しがちです。これが「他力」を誤解する元になってしまいます。他力というのは、中



一次掘削で地下3メートルまで（6月29日）

国の曇鸞大師（四七六—五四二、七高僧第三祖）が使い始められた用語であることを考えて、中国語での意味が「他」＝「彼」であることに注意しなければなりません。

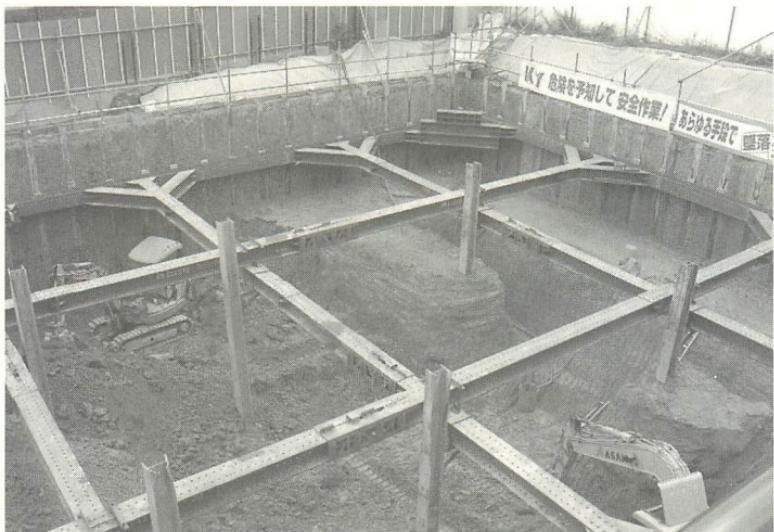
日本語 中國語

私 我 一人称

貴方 爾（尔） 二人称

彼 他 三人称

なので、他力は「彼の力」の意味で、「自分以外のものすべて」を指すのではなく、「彼からやつてくる力」という意味になります。こう考えると



二次掘削で地下7メートルまで（7月6日）

「他力は他人頼みだ」などと誤解したりする余地がなくなります。そして、すでに誤解してしまっている人にもたいへん説明しやすいものになると思します。



誌面の都合で第十八願が次部の課題となってしまいました。この第十七願は、次の第十八願と一緒に読んでいただきかないと偏った理解になってしまふので、次部をお読みになるときは、もう一度この部を開いてください。

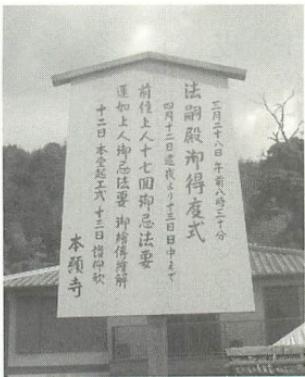


伝統のままに得度式

去る三月二十八日には本願寺法嗣^{ほうし}の得度式を執り行い、お陰をもつてすべて滞りなくこなすことができました。

まったく伝統のままに、何一つ省略・変形することなく、そしてほかのだれにも真似のできない本願寺の得度式が行えたことは、四十数名の掛役^{かかりやく}（スタッフ）を中心に多くの人たちの合力によるもので、これを御歴代に胸を張つて報告できたことは、私の無上の喜びです。このノウハウのすべてを欠けることなく伝えて、やがて次々代・第二十七世の得度式が行われるときにも、その時代の人々が同じ喜びを噛みしめることができ

伝統のままに得度式



るよう、念ずるもので

す。

当日は、朝八時からの饗の御膳を皮切りにすべての次第が順調に進み、午後は席を移して祝賀会が催されました。

饗の御膳

親鸞聖人ご出家の故事にちなんで、受式者が得度の直前に贅をつくしたご馳走でもてなしを受ける儀式。大家に伝わる献立による。最近、有職料理と呼ばれているものの一つ。



饗の御膳

縁儀（お練り）出列



お練り 智子前裏方の十二单

お練りには、縁や廊下を歩く「縁儀」と、建物の外部を練つて行く「庭儀」がある。法嗣の得度には縁儀を行う。住まい（大谷家）から道場（御堂）まで建物づたいにお練りをするところに、浄土真宗の出家が象徴されている。親鸞聖人の故事に従う伝統から、時代背景は鎌倉時代と設定するため、従来は受式者は直衣姿であったが、今回は女性なので十二单とした。

規式（得度式）

本願寺での得度式は、御堂を閉め切り、真っ暗な中で蠟燭と燈明の静かな明かりをたよりに行う伝統がある。八

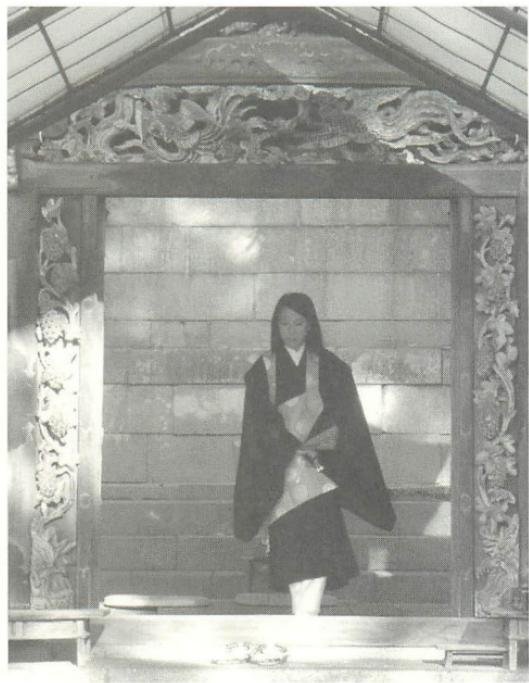
百年前、親鸞聖人が青蓮院の慈鎮和尚に得度を願い出られたときの故事に由来する。得度を受ける受式者と得度を授ける和上^{わじょう}のほかは式を補助する掛役だけが道場（式場）に入る。

初勤行

受式者にとつて初めての勤行。純白の装束で出仕。ここからは御堂を「昼」にしてのお勤め。



初勤行



大谷本廟参拝

また翌二十九日は、新門となつたことのご報告のため、私たち家族とともに東山・大谷本廟の宗祖親鸞聖人・御歴代とその親族のお墓に参拝しました。

得度式は内陣と外陣を御簾で仕切つて、御門徒の方々には外陣で参詣していただきます。しかしこの度は、場所の制約から仮御堂の大半を式場として使つたので、外陣が狭くなり、参詣くださる方々を少人数とし、何回にも分かれて二階の仮御堂に上がつていただきました。

私は、暗い階段の上り下りなど、お参りの方々に不自由な思いをさせるのではないかと、このことがたいへん気がかりになつていきました。ところが

ありがたいことに、これは取り越し苦労というものでした。参詣された方々が口々におっしゃったのは、つぎのような感想でした。

「二階の仮御堂に上がると、はじめは真っ暗で何も見えない。そのうち、だんだん目が慣れてきて、御簾の向こうの蠟燭の明かりの中に動く人影が見えてくる。普通の法要のように声明という音がなく所作だけの世界で、これが何とも幻想的だ。何百年も前にタイムスリップしたようで、今まで経験したことのない世界だった。時間の制約があるのも却つて緊張感があつて、まことに素晴らしいかった。」と。

「伝統とはこういうものだよ」と、参詣された方々から教えられることになり、今さらながら私たちの置かれているところの重さに気づかせていただことになりました。伝統を伝統のまま執り行う——もちろん、そのための努力は必要ですが——、ただそれだけで、限りない力があるのだということを実感することができたというのが、私としてのこの度の大きな収穫でした。



女性掛役

また、今回受式者が史上初の女性なので、受式者の身の回りの役を中心に、多くの女性の掛役に加わつてもらうことになりました。その結果、掛役が女性というのもおそらく史上初のことになつたと思われます。当然のことながら既に得度をした人たちで、教化の現場で活躍する住職、坊守（住職夫人）、後継予定者たちです。御習札の修得度と言い、完成度と言い、女性ならではのしなやかさと言い、彼女らの活躍には目覚ましいものを感じました。将来新門を助けてくれること間違いなしと、まことに心強い限りです。

心あらたに

大谷 光純

先日の得度式におきましては、遠方よりたくさんの方々にご参拝いただきました。皆様から祝つて頂き、また、参詣された方どなたも笑顔で帰つて行かれる様子を見てとてもうれしく思いました。

私自身はもちろんのこと、式を支えてくださった掛役の皆さん全員が初めてのことばかりで、どうなることやらと心配していましたが、熱心な練習の甲斐あつて立派な式になつたと思います。私の得度に関わつてくださつたこ



のご縁をこれからも大切にしていきたいと存じます。

御習礼では、ただただ所作を覚えることで精いっぱいでしたが、式当日はずつしりとした重みを受け止める一日でした。静かで真っ暗な中にポツとろうそくが灯る仮御堂で、御開山の正面に座つたとき、何とも言えない緊張が走りました。御開山の表情がいつもより豊かに思え、「しつかりせなあかんで」と厳しくにらまれているような、「あんたやつたら大丈夫」と励まして下さっているような。

得度を受けて、攝如（しょうによ）という法名を頂きました。これは「攝取不捨（左記）」という阿弥陀様のお心を頂いていけるようにという願いをこめてつけられたのだそうです。私にはとても恐れ多い名ですが、この名前に背中を押されて、一歩一歩精進してまいりたいと思います。

攝取不捨||阿弥陀仏が念佛する衆生をすべて淨土へ救いとつて、決して見捨てないこと。淨土教で説く、阿弥陀仏の根本的なはたらき。（『大辞林』より）

また、今後の実名として光純こうじん、雅号がごうとして愚岸ぐがんを頂戴しました。「○如」も「光○」も「愚○」も、大谷家代々の当主を表す名で、後継者として得度を受けたため授けられました。

当主になるまでにやるべき事はたくさんありますが、まずは歴史を学んでこれまでのご歴代二十五人がされてきたことを知り、自分の代で何を成し遂げるべきかを考えていきたいと思っています。

最近読んでいる本で、善光寺大本願・鷹司誓玉さんが書かれた自伝『流れのままに』（信濃毎日新聞社）があります。その中で「隨流而制流」という言葉が出てきます。

これを座右の銘とされているそうで、「時代の風潮や環境の変化にあつた時に、ことさら迷つたりせず、自然体に受け流しながらも自己を失つてはいけない。きちんとした信念をもつていつか自分がその流れの主体となり流れの方向を導いていく、そういうものになれ、との教え」だそうです。いま

の私の心境に合つていて、心に刻まれる言葉でした。まずは八百年かけて守られてきたものを知り、自分なりに工夫をしていくのはそれからだと思います。

歴史を学ぶことの意味はもう一つあります。それは「本当に重要で守るべきものは何か」をきちんと知ることだと思います。ご歴代が命をかけて守つてこられたものを私も守つていかなければなりません。時代に合わせて変わるものにはあつても、絶対に変えてはいけないものがある。その判断が出来なければ「名前だけ」「建物だけ」の中身のない抜け殻になります。どんな危機に遭遇しても決して曲がることのなかつたご歴代のご意志を私も受け継いでいきたいです。

皆様、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



式を終えて（掛役と）



祝賀会にて合唱（大谷樂苑）

お練りに華をそえる
可愛いお稚児さん



宴たけなわ（祝賀会 嵐亭にて）

あとがき

みめぐみの刊行委員会

嵯峨の山々からは時折夏を告げるホトトギスの声が聞こえます。本願寺では大きな建設重機が幾台も入り、お御堂建設の鎌音が高らかに響いています。光道台下はそんな光景を喜ばしく御覧になりながら、『第三十六部』の執筆に当たられました。

「阿弥陀様と本願（六）」は第十四願から第十七願までで、特に十七願「諸仏称揚の願」では、「名号」「回向」「他力」等、大切な項目を解説下さいました。

今号には、三月に行われた光純新門様の御得度式の様子を紙面を通して広くお伝えしようと、お写真もふんだんに盛り込みました。多くのスナップの中から数点を選んで下さったのは、表紙絵を担当されている禮子裏方です。また、前半に掲載の建設風景は光道台下が記録用に撮影されたものをお借りしました。

今回はともすると、珍しい写真に目が行きがちかもしだれませんが、真宗門徒として押さえるべきところをしっかりと押さえていきたいものです。

光純新門様も、今のご心境を紙面にお寄せ下さいました。この場をお借りして御礼申し上げます。

合掌

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』 1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第36部

2009年7月5日 印刷

定価 200円

2009年7月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめぐみの刊行委員会刊